

ラワン語ダル方言の動詞句と動詞文

大西 秀幸

(東京外国語大学博士後期課程)

キーワード：チベット=ビルマ語派，動詞，動詞複合体，動詞述部標識

1. 導入

本稿では、ラワン語ダル方言の動詞句と動詞文について記述する。以下ラワン語について 1 で基本的な音声・音韻と文法的特徴について示す。2 で語類について述べる。3 で動詞句の内部構造について記述する。4 で動詞文に関する記述を行う。

1.1. 言語の概略

ラワン語とはミャンマー連邦共和国、中華人民共和国、インド共和国に分布するチベット=ビルマ語派に属する言語で、話者人口としてインターネット版 *ethnologue*¹には話者数 63,000 人（2000 年調査）という数字があがっている。

ミャンマー国内に限ってみるとラワン語の話者は 62,000 人とある。LaPolla (1997: 1) によると“Rawang”という名称は *rame-wang* 「川の中流」という語からきており、これはラワン族と呼ばれる人々がもともとメコン河の中流域に住んでいたという説にもとづくという。

Rawang はあくまで他称であり、ラワン族は、民族全体を指す自称を持っておらず、普通は自らの属する部族名を自称として用いる。

Barnard (1934) によるとラワン語には 100 以上の方言があるとされ、方言間では意志の疎通がほとんど不可能な場合もある²。本稿で対象にする方言はカチン州のカウンランプー郡周辺で話される *Daru* 方言である³。本稿では方言について紙幅の都合上 *Yein Nwe Parr* (2012: 78) と *ethnologue* に主要方言として挙げられている方言のみを参考に主要なものだけを挙げておく（図 2 参照）。

¹ <http://www.ethnologue.com/language/raw>（最終閲覧日 2013 年 9 月 16 日）。

² これはおそらく彼らの居住地が山がちな場所にあり、相互の交流が難しかったことによると考えられる。

³ ヤンゴン在住のラワン人の一人である *Punsar* 氏によると、*dá*「鉄」、*rù*「作る」に分析でき、「鉄を作る人」という意味があるという。

Tibeto-Burman	
Western	Tibetan Kanauri, Himalayan
Sal	Baric Jinghpaw Luish Kuki-Chin
Central	Adi-Galo-Mishing-Nishi Mishmi Rawang
North-Eastern	Qiangic Naxi-Bai Tujia Tangut
South-Eastern	Burmese-Lolo Karen

図 1: TB におけるラワン語の位置 (Bradley (2002)を筆者が加筆修正)

Rawang
Daru (Jerwang)
Khrangkhu/Thininglong
Kyaikhu
Matwang
Tangsar
Thaluq

図 2: 方言の種類

方言同士の言語学的位置づけについて言及した先行研究は管見の限りない。方言のうち、Matwang 方言は、方言間の共通語的な位置づけになっており、異なる方言話者間の意思疎通のために用いられる標準語的な役割を果たすこともある。

ラワン語にはローマアルファベットによる正書法が存在する。これはアメリカの伝道師 Robert H. Morse によって制定されたもので、当初は伝道の中で聖書のラワン語訳を作るために作られた。正書法制定の基になった音韻解釈については Morse (1963) を参照されたい。

1.2. 言語的特徴

ラワン語には概して以下に示す言語的特徴がある。

- 基本語類: 名詞・動詞・副詞・小辞
- 基本語順: SV、AOV
- 格標示: 能格型
- 統語的役割の標示型: 動詞句にも名詞句にも標示される double-marking の特徴を見せる。
- 動詞と助動詞と接辞のくみあわせによる多様な動詞複合体がある。
- 分布の隣接するビルマ語、ジンポー語からの借用語が多数ある。

1.3. 資料について

本稿で用いる一次資料は、2011年から2013年にかけて4回にわたりミャンマーに渡航し、現地調査により収集したものである。筆者にラワン語を教えてくださいましたのはミッチーナ在住のラワン人である Diji 氏（1945年生）である。

同氏はカウンランプー郡出身で、言語形成期をダル方言の分布地域で過ごしている。ダル方言を母語とするほか、ジンポー語⁴とビルマ語に堪能である。シャン語も少しだけ分かるという。筆者は媒介言語として主にビルマ語を用いて調査を行った。作業時間は合計して180時間ほどである。

1.4. 音韻体系

本稿では、ダル方言の実例を正書法で綴らず、筆者自身の音韻解釈に基づく音韻表記を行っている。そのため本稿で示す例文を読むために最低限必要な音韻知識を示す。ダル方言のより詳しい音韻解釈や、実例については大西（2014）を参照されたい。

1.4.1. 音節構造

ラワン語の音節構造は一般に(1)のようにモデル化することができる。(…)で示した要素は非義務的な要素である。

(1) (I(M))V(E)/T

(1)においてIは頭子音(initial)、Mは介子音(medial)、Vは主母音(vowel)、Eは末子音(ending)、Tは声調(tone)を表す。

(1)を基本形とする主音節の他に、声調の対立のない副次音節が存在する⁵。副次音節は/ə/を母音として持つ音節で、副次音節は2つ連続することはなく、語頭以外の場所に副次音節が現れることもない。副次音節の構造を(2)に示す。

(2) (I)ə

副次音節の実現の仕方については、1.4.3に詳しく示す。

1.4.2. 子音音素

子音音素の目録を表1に示す。

⁴ ジンポー語はカチン州の地域共通語として機能している。

⁵ ラワン語には副次音節と主音節の組み合わせによる所謂一音節半語(sesquisyllabic word)が多数見られる。Matisoff (1973)はこの種の音節構造を持つ語を一音節半語(sesquisyllable)と呼んでいる。一音節半語はモン・クメール諸語(Mon-Khmer)に顕著にみられ、チベット・ビルマ諸語にも散見される。Matisoff (1990: 557)の記述を引用する。

The term sesquisyllable was introduced in Matisoff 1973 to refer to words that are “a syllable and a half” in length. Sesquisyllable consist of a fully stressed “major syllable” preceded by an unstressed “major syllable” that usually has shwa-vocalism.

表 1: 子音音素目録

		両唇	歯茎・硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声	p [p~p ^h]*	t [t~t ^h]*	k [k~k ^h]*	ʔ**
	有声	b	d	g	
破擦音	無声		ts, tɕ		
	有声		dz, dʒ		
摩擦音		(ɸ)	s [ts~s], ç		h [h~ç]
鼻音		m*	n*	ŋ*	
流音			r [r~ɹ]*, l*		
接近音		w***	j		

[...]は条件異音、*はIとEの両方に現れうる音素、**はEにしか現れない音素、***はIとMに現れることのできる音素、(...)は外来語にしか見られない音素を表す。

1.4.3. 母音音素

母音音素の目録を表 2 に示す。

表 2: 母音音素目録

	前	中	後
高	i	ɨ	u
中	e	ə	o
低	a		

母音音素のうち、副次音節には曖昧母音/ə/しか実現しない。副次音節における/ə/の音声的実現の仕方は、先行する子音によって予測できる。/ə/は音声的には曖昧母音より少し広い中舌半広母音[ə]で実現する機会が多いが、直前の子音によって異音が現れる。摩擦音に後続するときは[ɨ]、両唇音に後続する場合は[ɹ]、それ以外の場合は[ə]或いは自由異音[ɐ]が実現する。頭子音を持たない副次音節の場合、[ɐ]が現れる可能性が高い。

表 3 に、調査で得られた実例と母音の実現パターンを示す。初頭子音ごとに分けてまとめる⁶。

⁶ 外来語の中には上記の異音規則に違反するものもみられる。下記の2例はいずれもビルマ語からの借用語と考えられる。
/mæni?/[mini?][分]、/kəɸi/[kəɸi][コーヒー]

表 3: 副次音節の実現パターン

	副次音節の実現パターン
摩擦音	sə[si], eə[ei]
両唇音	pə[pu], mə[mu]
上記以外	tə[tʰə~tʰe], də[tə~de], kə[kʰə~kʰe], nə[nə~ne] lə[lə~le], rə[rə~re], ə[e]

1.4.4. 基本声調

声調は音節単位で付与されていると考えられる。弁別的な声調が現れるのは、開音節と E に閉鎖音が現れない音節で、E が閉鎖音の音節では弁別的な声調が現れることがない。

表 4: 基本声調

調類	記号	
低調	/ ` /	ピッチは低い。
中調	/ ˊ /	ピッチはやや高い。しかし、高調ほど高くはない。語末でやや下降することもある。
高調	/ ˈ /	ピッチは高い。語末で急激に下降することもある。

ラワン語の声調は表 4で示した声調素と中立アクセントといえる声調の実現がみられる。中立アクセントの実現パターンは2つある。まず E が閉鎖音の音節に現れる場合、調値は中調に聞こえる。次に副次音節に現れる場合、調値は後続する音節の調値に同化する。以上のように中立アクセントは他の声調と本質的に対立しえないので本稿では調類を標示しない。以下に例を挙げる。

- (3) kəgəp どのくらい
 kəgəp (等価物を)借りる
 kəgəp 契約をする
 kəgəp そのくらい

1.5. 形態音韻規則

本稿に関係する形態音韻規則として子音の挿入規則を挙げる。動詞語根に人称接辞が付加されるとき、動詞語根の音節の末子音が /p/か/v/の場合に調音点の対応する鼻音が母音の前に挿入される。()内の子音は挿入される子音である。a が子音挿入が起こる例、b が起こらない例である。

- (4) a. wap(m)-ù (3.SG が 3.SG を)撃つ
 b. wap-ŋ (1.SG が 2.SG を)撃つ
 (5) a. nat(n)-ù (3.SG が 3.SG を)こする
 b. nat-ŋ (1.SG が 2.SG を)こする

2. 語類

2.1. 基本語類

ラワン語の動詞についての記述を行う前に、ラワン語の基本語類について説明しておく。ラワン

語には基本語類として3つの語類を想定できる。

- 名詞類 (ひらいた類)
 - 人称代名詞、指示詞、数詞、類別詞、名詞、形容詞的名詞
- 動詞類 (ひらいた類)
 - 他動詞、自動詞 (コピュラ動詞、形容詞的動詞)
- 小辞類 (とじた類)
 - 後置詞、述部標識、従属節標識、名詞修飾小辞、助動詞、文小辞

2.2. 語類の分類基準

統語的機能をもたない間投詞を除けば、名詞類・動詞類・小辞類の4種の語類は、次に挙げる基準によって相互に区別される。

1. 単独で発話を構成するかどうか。
2. 否定辞が前接するかどうか。

上記の基準を満たすか否かで語類を分類すると、表5のようになる。

表 5: 語類の分類

	(A)	(B)
名詞類	○	×
動詞類	×	○
小辞類	×	×

まず (A) の基準について説明する。この基準は名詞類とその他の語類を分ける基準となる。以下に示すように、名詞類は単独で発話を構成することができる(6)。一方で、動詞類(7)、小辞類(8)は単独で発話しても、不適格になる。

(6) [名詞類]

A: rəwā dzəŋ lóŋ-ò = mā.

何 記録する DIR-3 =Q

何を記録しておくのですか？

B: dzədzi.

恩寵

(神の) 恩寵だよ。

(7) [動詞類]

*yəŋ 「見る」

(8) [小辞類]

*wā [HS]

次に、(B)の基準について述べる。この基準は動詞類とその他の語類を分ける基準となる。(7)に示すように、動詞類には否定辞 *mə* が前接することができる。

(9) *mə-ám=ē*.

NEG-食べる=NPT

食べない。

一方、動詞類以外の語類には、否定辞が前接することができない。たとえば「学生ではない」といいたければ、(8)a のように否定辞を名詞に前接させるのではなく、(8)b のようにコピュラ動詞の否定形を用いて表現しなければならない。

(10) a. **mə-dzòntsè*.

NEG-学生

b. *dzòntsè mə-í=ē*.

学生 NEG-COP=NPT

学生ではない。

2.3. 語類の特徴

語類はそれぞれ次に示すような特徴を持つ。

名詞類

- 名詞句の主要部になる。
- 後置詞を伴って一つの後置詞句をなす。
- 項、他の名詞句の修飾要素、或いは名詞述部として機能しうる。
- 名詞自体は曲用しない。
- 可算名詞は類別詞で修飾されうる。

動詞類

- 動詞句の主要部になる。
- 動詞句は述部となる。
- 助動詞、動詞接辞を伴って動詞複合体を形成する。

3. 動詞句

本章ではダル方言の動詞に関する記述を行う。

3.1. 動詞語根の構成

動詞の多くは一つの音節から成り立っており（単音節言語的特徴）、動詞もまた1音節のものがかか
 なるの数を占めるが、複数の音節から成り立っている動詞もある。そういった複数の音節からなる
 動詞はそれが一つの形態素（意味や機能を担う最小の単位）である場合もあるし、複数の形態素か
 らなる場合もある。

	語根の実例	構成	動詞の種類
単音節動詞	eòn 「言う」	単独形態素	単純動詞
	tìprāŋ 「完遂する」		
複音節動詞	də̀də̀mrín 「思い出す」	動詞+動詞	複合動詞
	tìlīm 「沈む」	名詞+動詞	

複数の要素からなる場合、①名詞要素+動詞要素、②動詞要素+動詞要素の2種類の組み合わせがあ
 り得る。ここでは単独形態素の動詞を単純動詞、複数の形態素からなる動詞を複合動詞と呼ぶ。

3.2. 単純動詞

単純動詞には一音節語、一音節半語（副次音節 + 一音節から成る語）の構造を持つのがほとん
 どであるが、二音節、三音節の語根も少数ながら存在する。

(11) 一音節語

wā	「話す」	gō	「呼ぶ」
rìl	「拾う」	aʔ	「飲む」
ām	「食べる」	tsən	「学ぶ」

(12) 一音節半語

ədír	「殴る」	mə̀tsit	「しわがある」
sə̀rē	「恐れる」	gə̀bà	「大きい、偉大だ」
ə̀ŋot	「教える」	tə̀nùŋ	「従う」

(13) 二音節語

mū̀nì	「慣れる」	də̀meà	「シャーマンの仕事をする」
toptip	「おしゃべりする」	nù̀ŋdàŋ	「拒絶する」

(14) 三音節語

oʔàì	「感謝する」
------	--------

3.3. 複合動詞

複合動詞は一つ以上の形態素が結びついて形成されている複合的な構造を持つ動詞のことをいう。

複合動詞はそれ全体が一つの動詞として機能するものであり否定辞 *mə-* は複合動詞の前に現れる。

複合動詞には名詞+動詞 (N+V) で構成されているものと、動詞+動詞 (V+V) で構成されているものがある。

3.3.1. N+V 動詞

N+V 動詞には (15) に示すような例がある。

(15) N+V 動詞

NV 動詞「意味」		N「意味」		V「意味」
kārū「書く」	<	kā「言葉」	+	rū「書く」
məkúnē「リードボーカルする」	<	məkún「歌」	+	ē「導く」
lègālē「手紙の配達する」	<	lègā「手紙」	+	lē「持っていく」
zàywàwà「歌を歌う」	<	zàywà「讚美歌」	+	wà「歌う」
bənriyēr「糸がよじれる」	<	bənri「糸」	+	yēr「よじれる」
tīyī「流れる」	<	tī「水」	+	ōyī「動く」
nèmbìjwà「風が吹く」	<	nèmbìj「風」	+	wà「行う」

N の位置に現れる要素は V に対して S であつたり、A であつたり O であつたりする。

3.3.2. V+V 動詞

V+V 動詞には

(16) に示すようなものがある。

(16) V+V 動詞

NV 動詞「意味」		V「意味」		V「意味」
tácá「理解する」	<	tá「聞く」	+	éá「知る」
dədāmín「記憶する」	<	dədām「思う」	+	rín「至る」
əŋjítətú「指導する」	<	əŋjít「教える」	+	ətú「案内する」

「動詞」+「動詞」からなる複合動詞は、典型的には V1+V2 という形式である。動詞連続と複合動詞は、二つ以上の動詞が助動詞や小辞を介在させることなく連続しているという点で、見かけ上同じである。両者の違いは、否定文にしたときに現れる。否定辞が V1 の直前にくるものは複合動詞、V2 の直前に来るものは動詞連続と解釈できる。以下に示す例の *tácá*「理解する」は複合動詞、*gwápé*「服を着る」は動詞連続の例である。

(17) *tácá*「理解する」<*tá*「聞く」+*éá*「分かる」

- a. *mə- táca*
NEG- 理解する

「理解できない」

- b. * tá mǝ- cá
 聞く NEG- 分かる

(18) gwápé 「服を着る」 < gwá 「着る」 + pé 「穿く」

- a. *mǝ- gwápé
 NEG- 着飾る
- b. gwá mǝ- pé
 着る NEG- 穿く
 「服を着ない」⁷

táca 「理解する」という動詞は táca という形式でひとまとまりをなす複合動詞である。一方、gwápé 「服を着る」は V1 と V2 の間に否定辞が介在しうるので、複合動詞ではなく、動詞連続であると解釈する⁸。

3.4. 動詞複合体

動詞は語幹に項の人称・数が標示される。人称・数の標示には、S を標示するパラダイム（自動詞屈折）と、A・O を標示するパラダイム（他動詞屈折）がある。人称・数動詞語幹は否定接頭辞、非直接要求接頭辞を伴って動詞の否定形、非直接要求形、非直接要求否定形を作る。さらに、事象が遠い過去であるか否か、再帰／相互、アスペクト（方向）、未来を表す接辞が添加される。また、他の発話では主動詞として現れる動詞が、文法化⁹を起こして主動詞の意味を補う助動詞として現れることもある。以上のようにラワン語の動詞は膠着的な特徴を見せる動詞複合体 (verbal complex) を形成する。動詞複合体内の要素の相対的位置をモデル化して図 3 に示す ([...]で囲った部分が屈折(...))で囲った部分が派生、[...]は人称・数屈折を受ける語幹)。

[非直接要求-] [否定-] (使役／自動化-) [動詞 (+助動詞) (-遠過去) (-再帰／相互) (-アスペクト (方向)) (-未来) v]

図 3: 動詞複合体のモデル

屈折範疇は非直接要求、否定、人称・数の三つがあり、本稿では主に屈折範疇にかかわる記述を行う。本稿では図 3 に示した要素のうち、特に屈折にかかわるような現象について記述する。

動詞複合体は述部標識を後続させることで述部になる。述部標識には平叙文、要求文、疑問文の

⁷ 「着るけど穿かない」という意味ではなく、「着ないし穿きもしない」という意味である。「着るけど穿かない」と言いたい場合は gwá=níg[逆接] mǝ-pé と表現する。

⁸ 複合動詞と動詞連続を区別することは可能であるけども、否定文にならなければ、両者を区別することはできない。動詞+助動詞全体を複合動詞として解釈することもできるが、自立語同士の複合のみを複合とみなすならば、複合動詞の数はかなり少ない。

⁹ ここでの文法化とは主に意味の漂白 (semantic bleaching) にことを指す。意味の漂白について詳しくは山梨 (1995) の説明を参照されたい。

3タイプがある。

ここで説明の便宜上、本稿における「文」を定義する。「文」とは述語を中心とする構造である。ラワン語の文の唯一の必須要素は述語であり、述語は必ず文の最後に現れる。そしてそれ以外の要素（補語）は必ず述語より前に現れる。文は述部標識と動詞語幹の形式の組み合わせによって作られる。

3.5. 自動詞と他動詞

ラワン語では、動詞が自動詞であるか他動詞であるかによって、屈折の仕方や述部標識の分布が変わってくることがある。

動詞が自動詞であるか他動詞であるかは、動詞の意味によって決まるのではなく、動詞に添加される屈折接辞が項をひとつしか標示しない自動詞のセットを取るか、二つ標示する他動詞のセットをとるか。すなわち、動詞に標示される項の数によって決まる。自動詞の場合はSの人称と数、他動詞の場合はAとOの人称と数の両方が標示される。意味的に三項に関与していたとしても、動詞に標示されるのは二項までである。しかし厳密にいうと、人称と数の組み合わせに対して、1対1の形式が割り当てられているわけではない（表7と表8参照）。

標示の仕方については3.7.1を参照されたい。以下に示す例は、それぞれ非過去の自・他動詞文である。動詞語幹は同じでも屈折接辞が異なっていることがわかる。

- (19) a. $\eta\grave{a}$ $\bar{\alpha}m\text{-}\eta$ = \bar{e} .
 1SG 食べる-1SG =NPT
 私は食事する。
- b. $\eta\grave{a}$ = i $\acute{\alpha}mp\bar{a}$ $\bar{\alpha}m\text{-}\eta\text{-}\grave{u}$ = \bar{e} .
 1SG =AGT 食物 食べる-1SG-3o =NPT
 私はご飯を食べる。

他動詞文においてOである「食物」が前の文脈から解釈可能で明示されない場合でも動詞は他動詞の形になるし、自動詞文に新たなOを導入することはできない。

3.6. 動詞語幹

動詞語幹は、自動詞と他動詞の屈折接尾辞との共起関係から(1)自動詞の屈折接尾辞しかとらないもの ($t\bar{e}$ 「大きい」、 $\acute{c}\bar{i}$ 「死ぬ」)、(2)自動詞と他動詞両方の屈折接尾辞をとるもの ($\bar{\alpha}m$ 「食べる」、 $j\grave{a}\eta$ 「見る、見える」)、(3)他動詞の屈折接尾辞しかとらないものに分けられる。自動詞の屈折しかとらないものには、使役などの項を増やす派生接辞が添加されない限り他動詞の屈折接辞をとることはない。自動詞と他動詞両方屈折接辞をとるものはさらに、そのふるまいによって3つに分けることができる。(i)SがAと同一である場合 (S=Aタイプ)、(ii)SがOと同一である場合 (S=Oタイプ)、(iii) 他動詞の動作主が非人称的なもので、自動詞と他動詞で意味に違いがはっきりと出ないもの (非人称S=Oタイプ)。非人称的なものはSとOが同一になるので(ii)の下位範疇といえるが、意味的に特殊であるために別とみなす。非人称的な文の場合、動作主を明示すると不自然になる。

(i) S=A タイプ

- (20) 自動詞 他動詞
 cākàn =ē. cākàn-ù =ē.
 狩 =NPT 狩-3O =NPT
 狩りをする。 それを狩る。

(ii) S=O タイプ

- (21) 自動詞 他動詞
 tī bīŋ =ē. tī bīŋ-ù =ē.
 水 満 =NPT 水 満-3O =NPT
 水が満ちる。 水を満たす。

(iii) 非人称 S=O タイプ

- (22) 自動詞 他動詞
 əni caʔ =ē. əni caʔ-ù =ē.
 髪 濡 =NPT 髪 濡-3O =NPT
 髪が濡れる。 雨などで髪がずぶ濡れになる。

3.7. 動詞文と特殊な動詞形

本節では動詞文を形成する述部標識と動詞の否定形と非直接要求形について述べる。

前述のように動詞文の述部は「動詞 + 述部標識」という構造を持つ¹⁰。場合によっては述部標識は音声的実現をもたないゼロ形式で現れる。述部標識を表 7 に示す。

表 7: 述部標識

平叙文		V=ē
要求文	直接要求文	V=∅
	非直接要求	lā-V=∅
疑問文	真偽疑問文	=mā
	疑問語疑問文	=lé

¹⁰ ラワン語において述語になれるのは、動詞のみである。しかし実際の発話には、名詞が述語の位置を占めているように見える文もある。LaPolla (2006) 他によると、一見名詞が述語に現れる文は、コピュラ動詞が省略された文であるという。

4 dāri vshaq-wàngv'n-rì =i d'vmshà-rì =i
 long ago old-very.old-PL =AGT shaman-PL =AGT
 gùng rá-à-wē (∅ Copula)
 tell DIR-TR.PAST -NOM (∅ Copula)
 (it) was told by damshas and very old men of long ago,

(LaPolla 2006: 1062 ページ番号のまま)

筆者はこの見解に対して、いくつかの理由で名詞文を想定している。

次にそれぞれの述部標識によってできる文について順番に示していく。

3.7.1. 平叙文

平叙文の標識は=ēだがこれは自動詞非過去と他動詞文において現れ、自動詞過去の場合は、述部標識が現れない。平叙文の場合、動詞は非過去と過去で次のような屈折を見せる。

表 8: 自動詞平叙文非過去の屈折 dī「行く」

S		屈折形式
人称	数	
1	SG	dī-ŋ
	DL	dī-εī
	PL	dī-niŋ
2	SG	è-dī
	DL	è-dī-εī
	PL	è-dī-niŋ
3	-	dī

表 9: 自動詞平叙文過去の屈折 dī「行く」

S		屈折形式
人称	数	
1	SG	dī-ŋ
	NON-SG	dī-εā
2	SG	è-dī
	DL	è-dī-εī
	PL	è-dī-niŋ
3	-	dī-ī

次にそれぞれの人称接辞について説明する。-ŋ は主語が単数の話し手であることを表す。

形態素	-ŋ
グロス	-1SG

- (23) ŋà ŋī -ŋ =ē.
 1SG 泣く -1SG =NPT
 私は泣く。

- (24) ŋà =nī r̄imnōŋ t̄iʔcé -gí ədá -ŋ =ē.
 1SG =TOP 友達 十 -CL もつ -1SG =NPT
 私には十人の友達がいる。

-ŋ は異形態として{-əŋ}をもち、{-əŋ}の出現条件は音韻的に説明できる。即ち動詞語幹が閉音節の場合である。-ŋ は過去の場合も同じ環境で現れる。

- (25) ŋà tābin -əŋ =ē.
 1SG 遊ぶ -1SG =NPT
 私は遊ぶ。

- (26) ŋà sānī hōl -əŋ.
 1SG 昨日 着く -1SG
 私は昨日着いた。

主語が聞き手であれば、数に関わらず、接頭辞 *è-* が現れる。

形態素	<i>è-</i>
グロス	2-

- (27) *nà è- èin.*
 2SG 2- 言う
 あなたが言った。

主語が双数の話し手か聞き手の場合、双数性を表す接尾辞 *-eĩ* が付加される。

形態素	<i>-eĩ</i>
グロス	-DL

多くの場合、「二人とも～する」という解釈と、「お互いに～し合う。」という2つの解釈が可能である。動詞の意味によってはどちらの解釈が適切か曖昧な場合もあり、文脈に依存することになる。

- (28) *ɲàní məcít -eĩ =ē.*
 1DL 顔にしわがある -DL =NPT
 わたしたち二人にはしわがある。

- (29) *ɲàní sərē -eĩ =ē.*
 1DL 怖がる -DL =NPT
 わたしたち2人は一緒に何かを怖がる／お互いを怖がっている。

話し手双数、及び複数の場合、包括／除外が形式的に区別されることはない。

主語が複数の話し手か聞き手である場合、接尾辞 *-niŋ* が添加される

形態素	<i>-niŋ</i>
グロス	-PL

- (30) *ɲàniŋ tɛim =jəŋ əl -niŋ =ē.*
 1PL 家 =LOC 存在する -PL =NPT
 わたしたちは家にいる。

数に関わらず、主語が第三者であれば、人称や数を表す標識は現れない。つまり無標である。

(31) a. àŋ miwámóŋ rəgaʔ hiʔ =ē.
 3SG 中国 エリア 着く =NPT
 彼は中国に着く。

b. àŋnī miwámóŋ rəgaʔ hiʔ =ē.
 3DL 中国 エリア 着く =NPT
 彼ら2人は中国に着く。

c. àŋnìŋ miwámóŋ rəgaʔ hiʔ =ē.
 3PL 中国 エリア 着く =NPT
 彼らは中国に着く。

次に、自動詞過去の文にのみ現れる標識を示す。
 主語が複数の話し手の場合、接尾辞-*cā*が付加される。

形態素	- <i>cā</i>
グロス	-1PLPST

(32) dāri laʔtaʔ í -jàŋ -cā.
 昔 そのまま COP -RPST -1PLPST
 (我々は) 昔、変わらないままでいた。

形態素	- <i>ī</i>
グロス	-3PST

(33) mələŋ eəŋbē tiʔ -pən =wā í -jàŋ -ī.
 PN すべて 一 -CL =[限定] COP -RPST -3PST
 マラン(という民族)はすべて一種類だけであった。

次に、他動詞の屈折パターンを示す。他動詞の屈折パターンは、①行為者の人称・数が標示されるもの、②行為の方向が標示されるもの、③対象の人称が標示されるものの3つに分けられる。

① 行為者の人称と数が標示されるタイプ

表 10: 他動詞の屈折 sat 「殺す」

● 話し手から聞き手への動作

		O		
		SG	DL	PL
A	SG			
	DL	sat-əŋ	sat-ɛī	sat-niŋ
	PL			

● 第三者から話し手への行為

		O		
		SG	DL	PL
A	SG			
	DL	è-sat	è-sat-ɛī	è-sat-niŋ
	PL			

-ŋ は行為者が単数の話し手であることを表す。行為者の人称が話し手以外の場合、è-[N1] で標示される。

次に、動作の方向が標示されるようなパターンを示す。話し手に向けた動作の場合、行為者である聞き手が単数であれば-à が、聞き手が複数であれば-ca が添加される。

● 聞き手から話し手への行為

		O		
		SG	DL	PL
A	SG	è-satn-à		
	PL	è-satn-ca		

次に、対象が標示されるタイプを示す。対象が第三者の場合、接尾辞-ù が添加される。3>3 の動作の場合、非話し手人称行為者の標識である è は現れない。

		O					O					O		
		SG	DL	PL			SG	DL	PL			SG	DL	PL
A	SG	satə-ŋ-ù			A	SG	è-satn-ù			A	SG	satn-ù		
	DL	satn-ù				DL	è-satn-ù				DL	satn-ù		
	PL	satn-ù				PL	è-satn-ù				PL	satn-ù		

3.7.2. 動詞の否定形

動詞の否定を表すのは否定辞 mə- で、これが動詞に前接する。

(34) lū 「得る」 > məlū 「得ない」

(35) lé 「かわいい」 > məlé 「かわいくない」

否定文は動詞の否定形と平叙述部標識を組み合わせることによってつくられる。

- (36) ɲà mǝ-ǝm-ŋ =ǝ.
 1SG NEG-食べる-1SG =NPT
 私は食事しない。

しかし、場合によっては、述部標識が無標で現れ、過去か非過去かという意味的な対立が消失することもある。

- (37) mǝ-ɖi
 NEG-行く
 (彼は) 行かない。 / 行かなかった。

3.7.3. 直接要求文

直接要求文は要求文の一種で、聞き手などに何かを実現するよう「直接的な表現で」¹¹要求する文である。要求文の機能は聞き手に対して何かを要求することであるので、自らの意志で行うことができないことを要求することはできない。

- (38) a. ɛ-ǝm-ù=Ø.
 N1-食べる-3=IMP
 (それを) 食べろ。
 b. *ɛ-lǝ=Ø.
 N1-良い=IMP

まず、自動詞の直接要求文の例を示す。

- (39) ǝl=Ø. (40) tǝŋ=Ø.
 存在する=IMP 帰る=IMP
 (そこに) 居ろ。 帰れ。

次に他動詞の直接要求文の例を示す。他動詞で且つ、行為に移動が含意される場合、聞き手が話し手に対してどの位置にいるのかが方向接辞で標示されうる。

表 11: 方向接辞

聞き手と話し手が同じ高さにいる	-rǝ
話し手が聞き手よりも高い位置にいる	-lùŋ
話し手が聞き手よりも低い位置にいる	-zǝ

¹¹ 「直接的なニュアンス」とは聞き手にその行為の実行を強制するようなニュアンスを指す。逆に非直接要求文にはそのようなニュアンスがなくあくまでその実行の諾否については聞き手に決定権があるということである。

- (41) $\eta\grave{a}$ =səŋ də-è-cà -á =Ø.
 1SG =LOC CAUS-N1-知る -2SG>1 =IMP
 私に知らせろ。
- (42) $\eta\grave{a}\eta\grave{\eta}$ è-dəsān -cá=Ø.
 1PL N1-守る -2PL>1=Q
 私たちを守れ。
- (43) a. $\eta\grave{a}$ =səŋ è-zī-ŋ -rā -á=Ø.
 1SG =LOC N1-与える-1SG -DIR -2SG>1=IMP
 こっちにきて私にくれ。
- b. $\eta\grave{a}$ =səŋ è-zī-ŋ -lùŋ -á=Ø.
 1SG =LOC N1-与える-1SG -DIR -2SG>1IMP
 こっちに降りてきて私にくれ。
- c. $\eta\grave{a}$ =səŋ è-zī-ŋ -zà -á=Ø.
 1SG =LOC N1-与-1SG -DIR -2SG>1=IMP
 こっちに上がってきて私にくれ。
- (44) $\grave{a}\eta$ è-sat-ù. =Ø.
 3SG N1-殺す-3O =IMP
 彼を殺せ。
- (45) $\grave{a}\eta\eta\grave{\eta}$ è-dəsān-ù. =Ø.
 3DL N1-守る-3O =IMP
 彼ら2人を守れ。

聞き手に行為を要求する場合、直接要求文を用いるのは非常にぞんざいな言い方に聞こえる。直接要求文だけで動作を要求するのは、聞き手が子供など、明らかに目下（と話し手がみなしている者）に対する要求の場合に限られる。通常、聞き手に動作を要求する場合は、依頼文(3.7.6.1)を用いる。

3.7.4. 否定要求文

否定要求文は、行為を聞き手に対して要求文（動詞は否定形）=禁止の文小辞 di [PRHB]の形で示される。

- (46) $m\grave{a}$ -è-zī-ù =Ø =di.
 NEG-N1-与える-3o =IMP =PRHB
 彼に与えるな

(50)は話し手自身が行おうとする行為について、聞き手に許可を求めるような文であり、(51)は第三者が行う行為の許可を聞き手に求める文である。

3.7.6.2. 勧誘

勧誘は聞き手に対して、自分と行動を共にするように求める行為であり、勧誘文はそれを引き起こそうとして発せられる文である。

- (52) $l\bar{a}-\acute{e}-di$ = \emptyset .
 EXHO-N1-行く =IMP
 一緒に行こう。

勧誘表現の否定「～しないでいよう」は、述語を直接否定するのではなく、 $m\bar{a}-V=n\bar{i}$ 「～せずに」に $l\bar{a}-\acute{e}-\acute{a}l$ 「いよう」をつけてあらわす。

- (53) $n\grave{a}mb\grave{a}$ = $s\grave{a}ŋ$ $m\bar{a}-\acute{e}-di$ = $n\bar{i}$ $l\bar{a}-\acute{e}-\acute{a}l$ = \emptyset .
 畑 =LOC NEG-N1-行く =SEQ EXHO-N1-存在する =IMP
 畑には行かないようにしよう。

3.7.6.3. 祈願

祈願とは神仏など、いわば超自然的存在に対する許可求めの行為（即ち願望表現の要求行為）であるといえる。祈願は一般に、自らの意志で実現不可能な事態の発生を望むものなので、話し手自身についての願望であっても、あたかも第三者の身に起こることであるかのような表現を用いる。

祈願文は他動詞文の場合、行為者が超自然的な存在と解釈できる。

- (54) $\acute{a}mj\bar{i}r$ $c\grave{a}ŋb\grave{e}$ $l\bar{a}-\acute{e}-g\acute{o}m-niŋ$ = \emptyset .
 種 全て EXHO-N1-燃-PL =IMP
 種がすべて燃えてしまいますように (lit. 種をすべて燃やしてください)。

(54)は動詞の 2>3 の人称屈折接辞をとるが、Aはこの発話の聞き手ではない。「種が燃える」という事象の実現を神仏に祈願するために、神仏を聞き手に見立てて、要求しているように見える文である。一方で、祈願文は自動詞文にも現れる。

- (55) $k\bar{u}$ $p\grave{e}$ $l\bar{a}-r\acute{e}z\bar{a}w\bar{a}-\acute{e}i$ = \emptyset .
 それ 男 EXHO-ひどい死に方をする-R/M =IMP
 その男がひどい死に方をしますように。

(55)は自動詞文で「男がひどい死に方をする」ことを祈願している文である。自動詞文で祈願文を表すのは、ごく慣用的な表現に限られるようである。

3.7.7. 疑問文

疑問文は聞き手への応答を求める表現である。疑問の文であることを示す疑問の述部標識を述語に後接させることによって作られる。疑問述部標識は、真偽疑問のものと、疑問語疑問のものとで使い分けられる。

3.7.7.1. 真偽疑問文

真偽疑問は動詞複合体に疑問述部標識=*mā*をつけてつくる。

- (56) *nā* =í *àŋ* =sàŋ *è-zī-ù* =*mā*.
 2SG =AGT 3SG =LOC N1-与える-3O =Q
 あなたは彼に与えるのですか？

- (57) *nā* =í *yó zəl* *bú-ù* =*mā*.
 2SG =AGT 布 洗う PFV-3O =Q
 あなたはもう布を洗ったのですか？

疑問述部標識=*mā*と同形式のものが、平叙述部標識に後続する例が実際の発話に散見されるが、疑問の述部標識とは明らかに分布が異なるため、筆者は直接述部標識に後続する=*mā*は述部標識ではなく「不確かさ」の疑問終助詞という別形態素として考える。

- (58) *ŋà* =í *mə-è-dēsù-ŋ* =ē =*mā*.
 1SG =AGT NEG-N1-頼-1 =NPT =[不確かさ]
 私が頼むんだっけ。

3.7.7.2. 疑問語疑問文

疑問語疑問は、主語や目的語或いは位置を表す補語が疑問語となり、疑問述部標識=*lé*を後接させてつくる。まず、疑問語の一覧を示しておく。

<i>rəgəp</i>	いつ
<i>rəmà/kəwā</i>	どこ (で)
<i>rəwā</i>	何
<i>rəyō</i>	どれ
<i>rəyō/rəgúŋ</i>	誰
<i>rəwatəkāŋ</i>	なぜ

- (59) *nā* *təúm* =sàŋ *rəgəp* *wā-ù* =*lé*.
 2SG 家 =LOC いつ 建-3O =Q
 あなたはいつ家を建てましたか？

(60) nā waʔ =səŋ rəmə è-nám-ù-dik =lé.
 2SG 豚 =LOC どこで N1-売-3O-FUT =Q
 あなたは豚に何を与えるの？

(61) naní àŋ =səŋ rəwā è-zī-sō-dik =lé.
 2DL 3SG =LOC 何 N1-与-DL-FUT =Q
 明日、あなた方二人はあなたに何を与えるの？

(62) rəyō əlādəŋwà mə-ip =lé.
 誰 よく NEG-寝る =Q
 誰がよく寝られていないの？

(63) àŋ =səŋ rəwatəkāŋ dəgàr-ù =lé.
 3SG =LOC なぜ 起-3 =Q
 なぜ彼を起こすの？

略号一覧

1	話し手人称	HS	伝聞
2	聞き手人称	IMP	要求文標識
3	第三者人称	LOC	処格
-	接辞境界	N1	非話し手人称行為者
*	例文について非文を表す	NEG	否定
+	自立語同士の複合による複合	NPT	非過去
	語の構成素境界	O	対象
=	小辞境界	PFV	完了
A	行為者	PL	複数
AGT	行為者後置詞	PRHB	禁止の文小辞
CAUS	使役接辞	Q	疑問文標識
CL	類別詞	R/M	再帰／中動
COP	コピュラ動詞	S	自動詞主語
DIR	方向接辞	SEQ	継起
EXHO	勧誘	SG	単数

引用文献

- Barnard, T. O. (1934). *A Handbook of the Rawang Dialect of the Nung Language*. Yangon: Government Printing and Stationery.
- Bradley, David. (2002). The subgrouping of Tibeto-Burman. (Beckwith I. Christopher, ed) *Medieval Tibeto-Burman Languages*, 161-178.
- Hongkai, Sun. (1988). Notes on a new language: Anong. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*, 11(1), 27-63.
- LaPolla, R. J. (1997). Argument determined constructions in Dulong/Rawang. In *Workshop on Valency-Changing*

- Derivations, Research Centre for Linguistic Typology, Australian National University.*
- _____ (2006). Copula constructions in Rawang. *Linguistic studies in Chinese and neighboring languages: Festschrift in honor of Professor Pang-hsin Ting on his 70th birthday*, 1059-1076.
- Lo Ch'ang-p'ei. (1945). A Preliminary Study on The Trung Language of Kung Shan. *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 343-348.
- Matisoff, James A. (1973). "Tonogenesis in Southeast Asia". Larry M. Hyman, (ed.), *Consonant Types and Tone*, 71-95. *Southern California Occasional Papers in Linguistics*, No. 1. Los Angeles: UCLA.
- Matisoff, James A. (2012). Bulging monosyllables: areal tendencies in Southeast Asian diachrony. In *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* (Vol. 16).
- Morse, R. H. (1963). Phonology of Rawang. *Anthropological Linguistics*, 17-41.
- _____ (1965). Syntactic frames of Rawang. *Lingua*, 15, 338-369.
- Yein Nwe Parr. (2012). *Khakabo Traveller: Yein Nwe Parr Military Column Leader's Personal travel accounts of the border*. Yangon: Nan Devi Publishing House.
- 山梨正明.(1995). 『認知文法論』 ひつじ書房.
- Hongkai, Sun and Liu Guangkun. (2009). *A grammar of Anong: language death under intense contact*. Boston: Brill.
- 大西 秀幸. (2013). 「ラワン語ダル方言の音韻」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』第9号 東京外国語大学地域文化研究科・外国語学部記述言語学研究室 [編], 3-22.

インターネット資料

ethnologue:http://www.ethnologue.com/language/raw/view/****EDITION**** (最終閲覧日 2014年08月25日)

Verbal phrases and verbal sentences in Daru dialect, Rawang language

ONISHI, Hideyuki

This paper discusses the verbal phrases and verbal sentences in the Rawang language, a Tibeto-Burman language of northern Myanmar, with data taken mainly from naturally occurring texts. Most of verbs consist of one syllable and few verbs consist of more than two syllables. The verb to consist of the multiple syllables may be either one morpheme (simple verb), or comprised of multiple morphemes (compound verb).

The verb forms a verb complex (verbal complex) showing an agglutination-like characteristic. The verb complex becomes the predicate by following with predicate markers. Predicate markers have assertive sentence, demand sentence, three types of the interrogative sentence.